様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５３４

研究課題名（和文）感情形容詞の意味と構文に関するドイツ語・日本語対照研究

研究課題名（英文）Japanese/German contrasitve Investigation for Semantics and Construction of Psychadjektives

研究代表者
室井　禎之（Muroi, Yoshiyuki）

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：６０１８２１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語・ドイツ語の感情形容詞に次の並行関係がある。1)感情の対象が焦点の場合はそれが首都後となり、経験者は斜格で現れる、2)経験者が焦点化されている場合はそれが主語となり、感情の対象は項ではなく副詞句で現れる。3)中間的な場合は対象と経験者の顕著さに大きな違いがないく、動詞構文において脱他動詞化構文に類似の現象がみられる。特に注目すべきは、一部の感情形容詞が脱他動的モダリティー構文（ドイツ語のsein + zu不定詞、sich lassen構文、日本語の可能構文、意志構文）と同様特性表現となる。一連の共通性はこれらの振舞が言語普遍的であることを示唆し、さらなる対照・類型論的研究の基盤となる

研究成果の概要（英文）：Between Japanese and German psychadjectives, the following parallelisms are observed: 1) If the semantic focus lies on the OBJEKT of the sensation or emotion the argument with the OBJEKT-role occupies the subject position and the EXPERIENCER-role occurs in an oblique case. 2) If the EXPERIENCER is focused semantically he become the subject and the OBJEKT appears as an adverbial. 3) There are cases in which no distinguished difference in saliency between the OBJEKT and the EXPERIENCER. This characteristic can be also observed in the detransitive constructions. It is especially interesting that the certain psychadjectives show a parallelism to detransitive constructions with modality (German sein + zu infinitive, sich lassen construction and Japanese construction of possibility and volition) which are individual-level expression. The series of parallelisms suggest that these findings belong to linguistic universality and can consist a foundation for further investigations.

研究分野：ドイツ語言語学

キーワード：感情形容詞　モダリティー　脱他動化　特性表現　linking

１．研究開始当初の背景

(1) 感情形容詞は日本語学においてとくに注目を浴びてきた。形容詞を属性形容詞と感情形容詞とに大別する考え方は日本語研究では広く受け入れられているが、それ以外の言語においては必ずしも自明でなく、これが間言語的に妥当するものであるかの検証が必要であった。

(2) また、感情を表す表現は意味と統語構造の間に曖昧さを示すことが linking の問題として以前から知られている。この問題は動詞に関しては多くの研究がなされ一定の成果を挙げているが、まだ完全な解決をみてはいない。さらに形容詞については詳細な研究はほとんど行われてはいなかったと言ってよい。

(3) 感情形容詞は日本語のみならず、ドイツ語においても特徴的なふるまいを見せている。日本語においてもドイツ語においても感情表現において経験者の項を表す際に特徴的に用いられる格である与格が広く使われていることから、日本語とドイツ語の対照が感情形容詞における意味と統語の関連の類型論的視点も視野に入れた研究の可能性が想定された。

２．研究の目的

(1) 日本語の感情形容詞の統語環境

1) EXP は A　（EXP=経験者、A=形容詞）
2) EXP（に）は A
3) EXP はOBJ がA　（OBJ=感情の対象）
4) EXP（に）は OBJ が A

とドイツ語の感情形容詞の統語環境

1) EXP(nom) COP A　(COP=コプラ)
2) EXP(dat) COP A
3) EXP(nom) COP P OBJ A (P=前置詞)
4) EXP(dat) COP P OBJ A
5) EXP(nom) COP OBJ(dat) A

を対照し、次の仮説を検証することを第一の目的とする：日独で 1 は対象の不明瞭な感情、2 は感覚を表す; 対象を伴う感情表現の場合日では 4、独では 3, 4, 5 が使用される; 日 3 は対象の明確な感覚を表し、独では明確な対象を持つ感覚は形容詞でなく、動詞を伴う構文が主として使われる。

(2) 日本語においてもドイツ語においても、感情形容詞の統語環境は動詞のそれと類似のものが認められる。とくに対象を伴う感情形容詞の統語環境のうち日 4 、独 3 は脱他動詞化構文、すなわち日本語の可能表現、ドイツ語の再帰構文との並行性が認められ、それらの意味・統語との異同を明らかにする。

(3) 日 3、独 3 の形容詞は OBJ が本来 EXP が占める位置に現れることを許し、OBJ の特性表現となることがあるが、これも動詞における項構造の転換現象と結び付けて検討する。

上記 3 点について日独の対照を通じた解明を行い、感情形容詞の意味的・統語的特性を明らかにし、形容詞の意味体系におけるその明確な位置づけならびに他の（特に動詞的）感情表現との比較を行うことが本研究の目的である。

３．研究の方法

(1) 先行研究の文献調査：感情形容詞の意味・構文の先行研究はドイツ語についてはさほど多くないが、日本語に関してはかなりのものがある。関連現象についての先行研究を含め、十分な文献調査を行った。

(2) データの収集：先行研究の少ないドイツ語に関しては十分なデータを集める必要がある。辞書等を出発点とし、コーパス調査、インフォーマント調査を行った。ドイツ語のコーパス調査は、マンハイムドイツ語研究所が公開しているコーパス分析システム COSMAS II を用いた。

(3) 分析・考察：得られたデータをもとに、感情形容詞の意味と構文を分析、考察し、その結果を論文等の形で公開する。分析の道具立てとしては、語彙概念構造、イベント項、stage-level vs. individual-level, 格付与の階層性などの諸概念を用いた。

４．研究成果

(1) 意味と構文の記述

以下の成果が得られた。感情形容詞がもつ統語環境は日本語に５つ、ドイツ語に 6 つのパターンがある。

日本語：

1) EXP (に) は OBJ が A
2) EXP (に) は (OBJ が) A
3) EXP は OBJ が A
4) EXP (に) は A
5) EXP は A

ドイツ語：

1) OBJ(nom) COP (EXP(dat)) A
2) EXP(dat) COP P OBJ A
3) EXP(nom) COP P OBJ A
   これは前置詞により 2 つに下位区分される
4) EXP(dat) COP A
5) EXP(nom) COP A

これらのうち、ドイツ語 2 はマージナルなものであるので考慮の外に置くと、日独のパターンはきわめて顕著な並行関係にあること

が判明した：1)感情の対象が意味的に焦点化されている場合はそれが統語的に優勢な項を占め、経験者が表示される場合は斜格で現れる(日 1・独 1)、2)経験者が意味的に焦点化されている場合はそれが統語的に優勢な項を占め、感情の対象が表現される場合は項としてではなく、副詞句で現れる(日 5・独 5)。3)中間的な場合は脱他動詞化構文に類似の構造を示す(日 2、3 独 3)。

この成果は感情形容詞が伝統的に一つの意味カテゴリーとして認められている日本語だけでなく、ドイツ語においても意味上一つのカテゴリーをなすことを示唆しており、この現象の類型論的研究への道を示している。

(2) 脱他動化構文と感情形容詞

感情形容詞は脱他動化構文と密接な関係にある。両言語において、他動詞をもちいた構造のいくつかにモダリティーとの強い結びつきがみられ、これが感情形容詞の構文と類似の振る舞いを見せていることが確認された。具体的には、「sein+zu 不定詞」構文、「sich+不定詞＋lassen」構文、日本語の可能構文、意志構文が挙げられる。これらの構文はモノの属性を前景化し、一種の individual level predicate になっていることが観察された。すなわちこれらの脱他動化構文は統語的に内項が外項の位置に格上げされるものとみなされるが、それにより、意味的にも通常は出来事を表す stage level predicate が属性の表現に転化するのである。上記の日独両言語の脱他動化構文のふるまいはどちらもこのことによって説明でき、またそれは感情形容詞のうちとくにモノを前景化するものの構文および意味と並行している。

(3) 感情形容詞と叙述形式

感情形容詞の叙述様式についても調査を行った。出発点はある種の感情形容詞では付加語用法と述語用法で認容度に違いがあるという事実である。日本語においても、ドイツ語においても付加語用法は形容詞と形容詞が修飾する名詞との結びつきは述語用法に比べ自由度が高い。述語用法における制限の強さは、文の形での叙述においては統語形式と意味役割の間にある linking の規則がはたらき、項の間の関係がそれに制約されるからであると考えられる。

さらに叙述用法における制限は、経験者項を主語とする場合は基本的にかからず、対象項が主語となる場合に起こることが確認された。そして、その場合叙述全体は対象項の恒常的性質を示す、すなわち、individual-level のものとなる。例えば日本語「幸せな」とその意味的な対応物であるドイツ語 “glücklich“ は語彙的には経験者の感情を表す stage-level の述語であり、その意味はイベント項 e を含む以下のような構造を示すと考えられる

λy λx λe [glücklich(e) & EXP(e, x) & OBJ (e, y)]

しかし、この二つの形容詞は感情の対象を主語にすることもできる。その場合は、格付与に関する一般的規則

Agens > Experiencer > Objekt

の存在により、経験者項の出現が抑制される、すなわち意味構造はイベント項と経験者項をもたない次のようなきわめて単純な形式になる

λy [glücklich (y) & OBJ(y)]

また、ドイツ語のコーパス調査によれば、それらの文の主語は定でありかつコンテクストに結びついている。この分布は、対象項が主語となる際の意味構造の転換によって動機づけられていること、また、その意味構造は前述のモダリティー構文のそれとも同種のものであることを示した。

さらに、日本語の「だ」およびドイツ語のコプラの統語的・叙述的機能が、一般の動詞と異なり、意味役割の付与という点で不確定性をもつことが述語用法においても比較的自由な結びつきを許すことにあずかっていることが示唆される。

こういった一連のドイツ語と日本語における共通性・並行性はこれまでほとんど注目されることがなかったが、これらの振舞が言語普遍的であることを示唆し、さらなる対照・類型論的研究の基盤となる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① Yoshiyuki Muroi: Detransitivität und Modalität im Deutschen und im Japanischen. Jahrbuch für Internationale Germanistik, Reihe A, Kongressberichte. 印刷中、査読有

② Yoshiyuki Muroi: Gefühlsadjektive –ihre Semantik und Konstruktion im Deutschen und Japanischen. Zhu, Jianhua, Zhao, Jin, Szurawitzki, Michael (Hg.)：Germanistik zwischen Tradition und Innovation. Band 2, Frankfurt/M. etc., 2016: 155-160. 査読有

③ 室井禎之「感情形容詞における構文一心理動詞との関連において」清野智昭編『ドイツ語における有生性』（日本独文学会研究叢書 116 号）2016 年 5 月: 5-17, 査読無

〔学会発表〕（計６件）

① Yoshiyuki Muroi: Gefühlsadjektive in attributiver und prädikativer Verwendung. 43. Österreichische Linguistiktagung, Workshop „Thetisch-Kategorisch: Wie werden solche Satztypen einzel- und übereinzelsprachlich unterschieden?“ Alpen-Adria-Universität Klagenfurt (2017 年 12 月 9 日)

② 室井禎之「形容詞と叙述のタイプ」ドイツ文法理論研究会(2017 年 10 月 1 日)

③ 室井禎之「脱他動化構文、モダリティー、および関連現象　-ドイツ語と日本語の対照から」早稲田ドイツ語学・文学会(2016 年 9 月 22 日)

④ Yoshiyuki Muroi: Detransitiviät und Modalität im Deutschen und im Japanischen. Asiatische Germanistentagung 2016 Seoul. (2016 年 8 月 25 日)

⑤ Yoshiyuki Muroi: Gefühlsadjektive － ihre Semantik und Konstruktion im Deutschen und Japanischen. 13. IVG-Kongress Shanghai 2015. (2015 年 8 月 25 日)

⑥ 室井禎之「感情形容詞における構文　－心理動詞との関連において－」日本独文学会 2015 年春季研究発表会(2015 年 5 月 31 日)

６．研究組織

(1)研究代表者

室井　禎之（Muroi, Yoshiyuki）
早稲田大学　政治経済学術院　教授
研究者番号：60182143